

山首上人さまご講演

報恩・感謝

ほうおん

かんしゃ

喜び合い

よろこ

あ



ウメ「江南所無」

法華経を日常生活に生かしましょう

報恩

人は皆、与えられた恩に対して報いたいと努力する所に喜びがあります。

恩に報ずることをすれば、相手も喜び、自分も嬉しいものであります。

お互いに喜び合う基は、感謝・報恩の念であります。

こうなれば世の中は、本当に楽しいであります。

|| 御開山上人御法話資料 ||

「報恩」は、ありがたいうという感謝から生まれます。この心が持てるかどうか、人生の大事であります。

人は誰も、願いか望みを持っておりません。しかしその思いは、必ずしも叶えられないという不満が生じます。

お釈迦さまはこの世界を「三界皆苦」と言われました。「苦」に満ちているということです。

この苦は、苦しいということだけでなく、
 〴〵思うようにならない〴〵という「不満足」
 をも意味しています。そういう世界に
 いるのですから、思うことがたとえ十あつた
 としても、二つか三つ何とかなれば上等か
 も知れません。

苦の代表は「生・老・病・死」の四苦で
 あります。

「生」は〴〵生まれる〴〵ということですが、
 同時に〴〵持つて生まれたものに対する不満〴〵
 と考えたらいいと思います。顔・形もそう
 でありますし、能力についても言えます。
 それらのことに關する不満が、人間には大

なり小なりあるものです。

「老」は〴〵年を取る〴〵ことです。いつまで
 も若くありたいと願つても、そうはゆきま
 せん。

先日、捜し物をしていて机の引出しをあ
 ちこち開けていたら、私の若い頃の写眞が
 出て来ました。荒行を出て間もない頃に写
 したのでしよう、髪も髭もぼうぼうで、ど
 ういう訳かモーニングを着ています。おそ
 らく日本福祉大学の入学式の時にでも写し
 たのだと思います。何しろ五十年前の写眞
 ですから、自分で言うのも変ですが顔につ
 やもあり、いい顔をしています。最初に見

た時、これは誰だ、と思つた程です。

人間は、年を重ねるごとに姿・形が変わつてゆくものです。外見だけでなく、中身も能力も変わります。いい方に変わる場合もあれば、悪い方に変わることもあります。最近私も手・足が固くなって、古くなつたなあ、と思ひますが、いたし方ありません。「病」。好むと好まざるとにかかわらず、また、年齢に関係なく、誰でも病気になることはあるものです。

そうして最後に「死」つまり、終わりを迎えるわけです。

この四苦は、人間である以上避けること

の出来ない人類共通の苦であります。

他に「愛別離苦・求不得苦・五陰盛苦・怨憎会苦」の四苦があつて、合わせて「四苦八苦」と言われています。一口で言うなら、思うことが思うようにならないこと、と言つたらいいでしょう。

世の中はそうであります。最近の社会の情況を見渡しますと、文明が飛躍的に進歩し、いろいろなことが考えられない程便利になりました。昔ほどの家でも薪でごはんを炊いていました。それだけ早起きする必要がありました。今は電気炊飯器でタイマーをセットしておけば寝ている間に

炊(た)けます。〃あたりまえ〃のことになつて
 いますが、ほんの数(すう)十年前(ねんまえ)には考(か)えられな
 かつたことです。

日常生活(じちじふせいじかつ)はこのように便(べん)利(り)で暮(く)らしよ
 くなりましたが、一方(いつぱう)で、思(おも)うようにならな
 いことは一向(いっこう)になくなる気(け)配(はい)がありません。

世(よ)の中(なか)便(べん)利(り)になると人(にん)間(げん)はどうなるかと
 いうと、感(かん)謝(しゃ)が足(た)りなくなるのです。〃あ
 たりまえ〃が強(つよ)くなり、あ(あ)りがたい〃が少(すく)
 なくなるから、苦(くる)しみが増(ま)すのです。

この世界(せかい)には「三(さん)苦(く)」と言(い)つて、生(せい)存(ぞん)
 るものには三(さん)つ(つ)の苦(く)があると言(い)われていま
 す。

一、苦(く)苦(く)。病(びやう)氣(き)や貧(びん)乏(ぼく)など、好(この)ましくな
 いことか(か)ら感(かん)ずる苦(く)惱(のう)です。

二、行(ぎやう)苦(く)。世(よ)の中(なか)の移(うつ)り変(か)わりを見(み)て感(かん)
 ずる苦(く)惱(のう)です。最(さい)初(しょ)は良(よ)いこと(こ)に思(おも)えても、
 時(とき)が経(た)つにつれ(つ)て苦(く)になること(こ)があります。
 おい(お)しい物(もの)を食(た)べている間(あいだ)はよ(よ)くても、食(た)
 べ過(す)ぎたら苦(くる)しくなるよう(よう)な物(もの)です。

三、壊(え)苦(く)。い(お)いと思(おも)つてい(い)るもの(もの)が壊(こ)わ
 ること(こ)によ(よ)つて感(かん)ずる苦(く)惱(のう)です。い(い)くら若(わか)
 いと思(おも)つてい(い)ても、年(とし)を重(かさ)ねるに從(したが)つて肉(にく)
 体(たい)の機(き)能(のう)が衰(おとろ)えること(こ)など壊(え)苦(く)と言(い)えます。
 そう(そう)い(い)う思(おも)うよう(よう)になら(ら)ないこと(こ)の多(おほ)い
 世(よ)の中(なか)ではあ(あ)つても、嬉(うれ)しいと感(かん)ずること(こ)

はあります。病気が治れば嬉しいし、給料が上がれば嬉しいことです。しかしそれらのことは個々の喜びです。人間にとって大事なことは、特別いいことはなくても、こうして元気に生きていられることを喜ぶことです。

皆さんそれぞれ元気に暮らしておみえです。元気なうちはどうしても、自分の力で生きていると思いがちですが、人間ははっきり言って、自分の力だけで生きているのではありません。今生きていられるのも、家の中で言うなら食事の準備や掃除・洗濯など家事をして下さる人、外に働きに出て

家族を養って下さる人、そして、楽しみを与えてくれる子どもたちがいるからです。人間は一人の力であれこれ出来るものではないのです。

キリスト教の世界では、神様がこの世界を六日間で作ったと言います。この六日間に地上世界のすべてを作り、六日目の最後にそれもその日の暮れに人間を作ったと言います。だからあまり出来がよくなって「欠陥商品」だと言う人もいますが、他のものはすべて、人間のために作られたと言われています。

ちなみに、六日間一生懸命働きすぎたの

で神様もさすがに疲れて七日目を休み、日曜日としたのだそうです。

人間のために他のものがあるのなら、それを利用して当然ということになります。が、仏教はその立場を取りません。すべてのものはみな同じように、尊い生命を有していると考えerのです。そして、人間はいろいろなものの力や生命を頂いて、生かして頂いていると考えerのです。また、そう考えてゆかなければなりません。

私共いいことがあれば嬉しいと思ひます。が、そうした喜びは別として、日常受けているいろいろな恩に目を向けてゆくことが

大切です。

日本人ならあたりまえのようになってい、字を知っているということもそうです。決して自然に覚えたわけではありません。小学校、中学校と教育を受ける中で先生方が教えて下さったから、読み・書きができているので。そうした恩を忘れてはいけません。

今生きていられるのは、決して自分の力だけではありません。大勢の人、多くのものおかげで生かして頂いているというのが本当です。

そこで今度は、自分が生きることによつ

て少しでもまわりの人の力になれるような喜びになるような生き方をしてゆかなければ、ということになります。

三界皆苦と言われる中であって、思うことが思うようになれば嬉しいことですが、同時に、まわりの人に自分の出来ること、何かをして、喜んで頂けるなら言うことありません。

これが法華経の心です。法華経は、自分の喜びはさておいて、まず先に相手を喜ばせ、相手の喜ぶ姿を見て自分も喜ぶという、間接的な喜びを教えているのです。自分を先に幸せにしてほしいというのではないの

です。

幸せという大げさなことではなくても、どんなに些細なことであつてもとにかく相手を喜ばせてゆくことが、一番の基本であります。

そうしてみんなが、ありがたい。ありがたいと喜びあつてゆかれたら、本当に素晴らしい世界になると思いますが、なかなかそういう世界は簡単に来そうにありません。つい自分の思うようにならないことが先に頭に浮かびますから、ありがたいと喜べないのです。

法華経を私共いつも読み、聞き、信仰し

ていると言いますが、法華経は、日蓮聖人も杉山先生も御前様もおっしゃってみえますように、読むだけ、聞くだけでは充分ではありません。「身・口・意」と言って、口に読み、心に思い、身に実行する、この三つが揃わなければ、法華経を信仰しているとは言えません。日常生活に法華経の心

が生かされなければ、知っていても知らないと同じです。

どんな世の中にあっても、目の前にいる人を自分の出来ることで喜ばせ、それが出来ることが嬉しい。と自分の喜びにしてゆかれたら、こんないいことはありません。